



# 中山盗伐事件

歴史に残る大事件



中山盗伐事件の裁判模様を伝える新聞

明治44年の網走本線開通によって黎明を迎えた木材業界は、その後の第一次世界大戦に伴う木材の需要増により、常呂川上流の木材資源開発を強く要請しましたが、約400平方キロメートルもある官有地には監守役にあたる役人もほとんどおらず、道路も満足にない状態でしたので、簡単には払い下げの許可が下りませんでした。しかし、このことは裏を返せば少しぐらい木を切っても発見されないということでもありました。

誰が最初にどんな方法で盗伐を行いだしたかは定かではありませんが、大正7、8年頃から木材ブームに乗じて一攫千金を夢見る木材業者達は莫大な盗伐を行って利益を収めていたようでした。稼動夫もその分け前にあづかり、飲食店街は天井知らずの好景気に沸きました。盗伐をかぎつけた新聞記者が現地視察を行った折、終始飲食の供応を受け、帰りには大金を握らせて黙殺を頼まれたことなども語り草となっています。

それほどにも札びらの飛んだ中山公有林の大盗伐も、造材師の帳場と山頭の内紛がもとで大正9

年に司直の手が入り、木材業者の大物2人を含む多くの関係者が検挙されました。釧路地裁における公判では、30人が有罪とされましたが、被告人たちはこれを不服として控訴し、2人の大物は後に法曹界の第一人者といわれていた花井卓蔵博士を弁護につけました。この中山盗伐事件は、盗伐された山の蓄積量が把握されておらず、また盗伐の証拠を隠滅するための伐根に火をつけて燃やすなど悪質なものもあって、盗伐量が明確にできず難行しました。結局、大物事業主は花井博士一代の名弁護をもって証拠不十分の無罪となりましたが、このことがまた当時全道を風靡した話題となりました。この事件を契機として道庁は、官行斫伐を開始して直営生産事業に踏み切り、地方分区員駐在所を新たに設けるなど、野放し状態ともいえた森林の管理強化に着手。木材界のみならず、官公林を管轄する役所にも大きな反省と影響を与えた歴史に残る大事件となりました。

(参照：置戸町史、置戸町史上巻、続置戸町史)

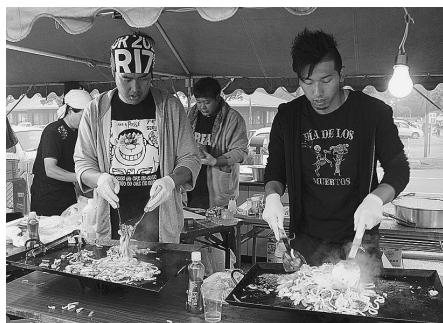


## 若者パワーで、地域を元気に

勝山活性化プロジェクト代表 松崎 真也さん



勝山地区の元気を考える活性化プロジェクト、通称「かつげん」。チームの発足は今から2年前。松崎さんらが中心となり「旧勝山小学校を利用して若者が気軽に集える場を作れないか」と勝山地区に住む農業青年達に声をかけ発足。現在、メンバーは7人で、お祭りや盆踊りなどへの参加・協



力を通じて、若い力で地域を盛り上げてくれています。結成当初は仲間内での親睦がメインでしたが、「どうせなら」と地域に貢献できる活動へと徐々に取り組み範囲を広げ、今では勝山地区のイベント時には欠くことのできない存在となりました。代表を務める松崎さんは「特別な活動をしているつもりはないです。基本は自分たちが楽しみたいだけなんです」と謙虚なコメント。勝山地区のみならず置戸町全域にまで元気を分けてくれそうな勢いの「かつげん」。今後益々の活躍に期待です。